「クマ送り」の系統

——羅臼町オタフク岩洞窟におけるヒグマ儀礼の検討——

佐藤孝雄

はじめに
1 遺跡と出土資料の概要
2 オタフク岩洞窟のヒグマ儀礼
3 「クマ送り」の系統
おわりに

論文要旨

アイヌ文化の「クマ送り」について系統を論じる時，考古学ではこれまで，オホーツク文化期のヒグマ儀礼との関係のみが重視される傾向にあった。なぜならば，「アイヌ文化期」と直接的な連続性をもつ擦文文化期には，従来，ヒグマ儀礼の存在を明確に示し，かつその内容を検討するに足る資料が得られていなかったからである。ところが，最近，知床半島南岸の羅臼町オタフク岩洞窟において，擦文文化終末期におけるヒグマ儀礼の存在を明確に裏付ける資料が出土した。

本稿では，まずこの資料を観察・分析することにより，当洞窟を利用した擦文文化の人々がヒグマ儀礼を行うに際し慣習としていたと考えられる6つの行為を指摘し，次いで，各行為について，オホーツク文化の考古学的事例とアイヌの民俗事例に照らして順次検討を行った。その結果，指摘し得た諸行為は，オホーツク文化のヒグマ儀礼よりも，むしろ北海道アイヌの「クマ送り」，特に狩猟先で行う「狩猟グマ送り」に共通するものであることが明らかとなった。このことは，擦文文化のヒグマ儀礼が，系統上，オホーツク文化のヒグマ儀礼に比べ，アイヌの「クマ送り」により近い関係にあったことを示唆する。

発生に際し，オホーツク文化のヒグマ儀礼からいくらかの影響を受けたにせよ，今日民族誌に知られる北海道アイヌの「クマ送り」は，あくまでも北海道在地文化の担い手である擦文文化の人々によってその基本形態が形成されたと考えるべきである。

はじめに

クマに関する信仰と儀礼はユーラシア，北米両大陸の北部にかけて広く分布している。その中にあって北海道やサハリンに居住するアイヌの「クマ送り」は，狩猟で得たクマ［狩猟グマ］の他に，飼育した仔グマ［飼育グマ］を対象とする数少ない儀礼の１つとして，早くから注目されている（Hallowell 1926)。

図１　ヒグマの骨が出土した擦文文化期の遺跡（オタフク岩洞窟を除く）

この「クマ送り」の系統を論じる時，考古学ではこれまで，オホーツク文化期のヒグマ儀礼との関係が重視され（渡辺 1974, 菊池 1977・1990等),「アイヌ文化期」と直接的な連続性をもつ擦文文化期のヒグマ儀礼との関係が論じられることはほとんどなかった。その主な原因は，従来，擦文文化期のヒグマ儀礼の存在を明確に示し，かつその内容を検討するに足る資料が得られていなかったことにあったと言える。擦文文化期の遺跡からヒグマの骨が出土した例は，これまで４例が報告されているのみであり（表１・図１），金子浩昌や西本豊弘等がこれらの資料をもとに該期におけるヒグマ儀礼の存在を指摘してはいたものの，確証が得られないままとなっていた。

ところが，最近，知床半島南岸羅臼町オタフク岩洞窟において，擦文文化終末期の土器(図２)(1)に伴いヒグマの骨が多数集中して出土した（涌坂編 1991)。これらの骨のうち，特に頭蓋骨については配列された痕跡と後頭部における穿孔の存在が確認されたことから，擦文文化期に当洞窟でヒグマ儀礼が行われていたことは確実と言える。そこで，本稿では，まず，当洞窟の資料を観察・分析することにより，擦文文化終末期のヒグマ儀礼で行われていた諸行為を推定し，それら

表１　擦文文化期のヒグマ骨出土例（オタフク岩洞窟以外）

No.	遺跡名	出土状況	内容	文献
1	小幌洞窟A地点	包含層中	四肢骨のみ［詳細は未発表］	西本1989
2	神恵内観音洞窟	包含層中	四肢骨のみ［詳細は未発表］	金子1984
3	須藤遺跡	９号住居床面	Hum. R1, Ul. R1, Hum or Fem（１）［成獣］	西本1981
		18号住居床面	Max. L1・R1, Man. L1・R1［同一個体，成獣］	
4	中ノ島遺跡	包含層中	I^3. L1・R1, M^1. R1, M^2. L1, M_1. R1, M_3, L1［同一個体？，成獣］	西本・宮 1989

註　Max：上顎骨，Man：下顎骨，I：切歯，M：後臼歯，Hum：上腕骨，Ul：尺骨，Fem：大腿骨，L：左，R：右，（　）内は破片数を示す。I・Mの後ろの数字は第何歯であるかを示し，上顎歯は上，下顎歯は下に数字を付した。尚，No.は図１の遺跡番号と対応する。

図2　オタフク岩洞窟から出土した擦文土器（涌坂編1991，第97・98図より作成）

をオホーツク文化の考古学的事例とアイヌの民俗事例に照らして検討した後，あらためてアイヌの「クマ送り」の系統について考えてみたい。

1　遺跡と出土資料の概要

（1） 遺跡の立地と性格

オタフク岩洞窟は，羅臼町市街地から南西に約4km離れた松法町に位置し（図3），標高40～

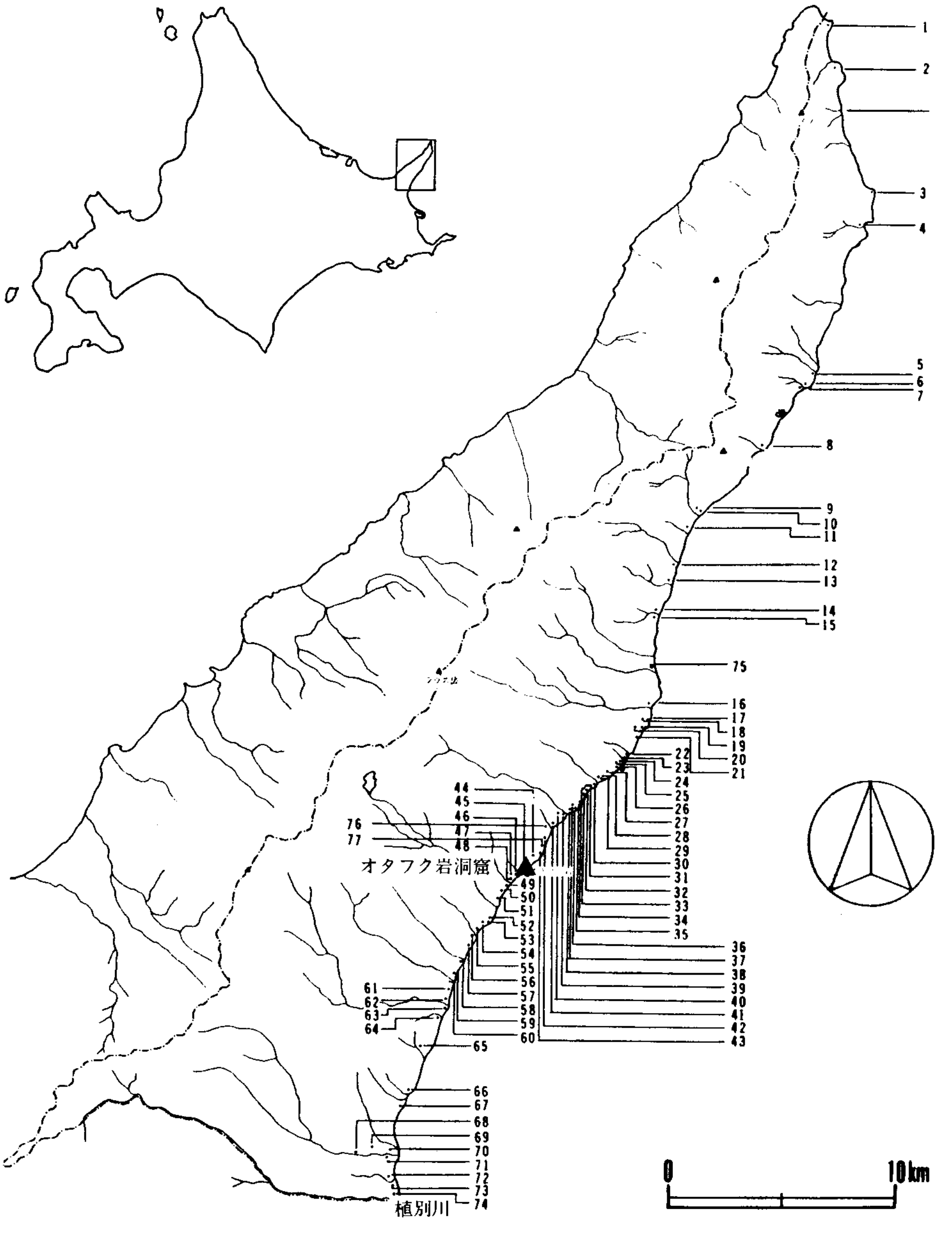


図3　羅臼町の遺跡（澤編1971，Fig.1に加筆）

50m程の海岸段丘の中腹に開口している（図版１)。1989年に行われた発掘調査の結果，洞窟内部には続縄文，オホーツク，トビニタイ，擦文，「アイヌ」各文化期の遺物包含層が重層的に堆積していることが確認され，古代から近世の長期に亘り，様々な文化集団が当洞窟を繰り返し利用してきたことが明らかとなった。当洞窟の約200m南西には，オホーツク文化期の集落址として松法川北岸遺跡があり（涌坂・豊原編 1984)，また，ほぼ真上に当たる段丘頂部にはトビニタイ文化期の住居址群も検出されている（澤ほか1971，涌坂編 1991)。しかし，擦文文化期の大規模な集落址は，洞窟周辺のみならず，南北50kmに及ぶ羅臼町全体を見てもこれまで確認されていない(2)。唯一，該期の住居址が検出された遺跡として，植別川遺跡が知られるが，そこも本洞窟からは南に15km以上離れている(図3 No.74，豊原・涌坂 1981)。現時点での遺跡の分布からみる

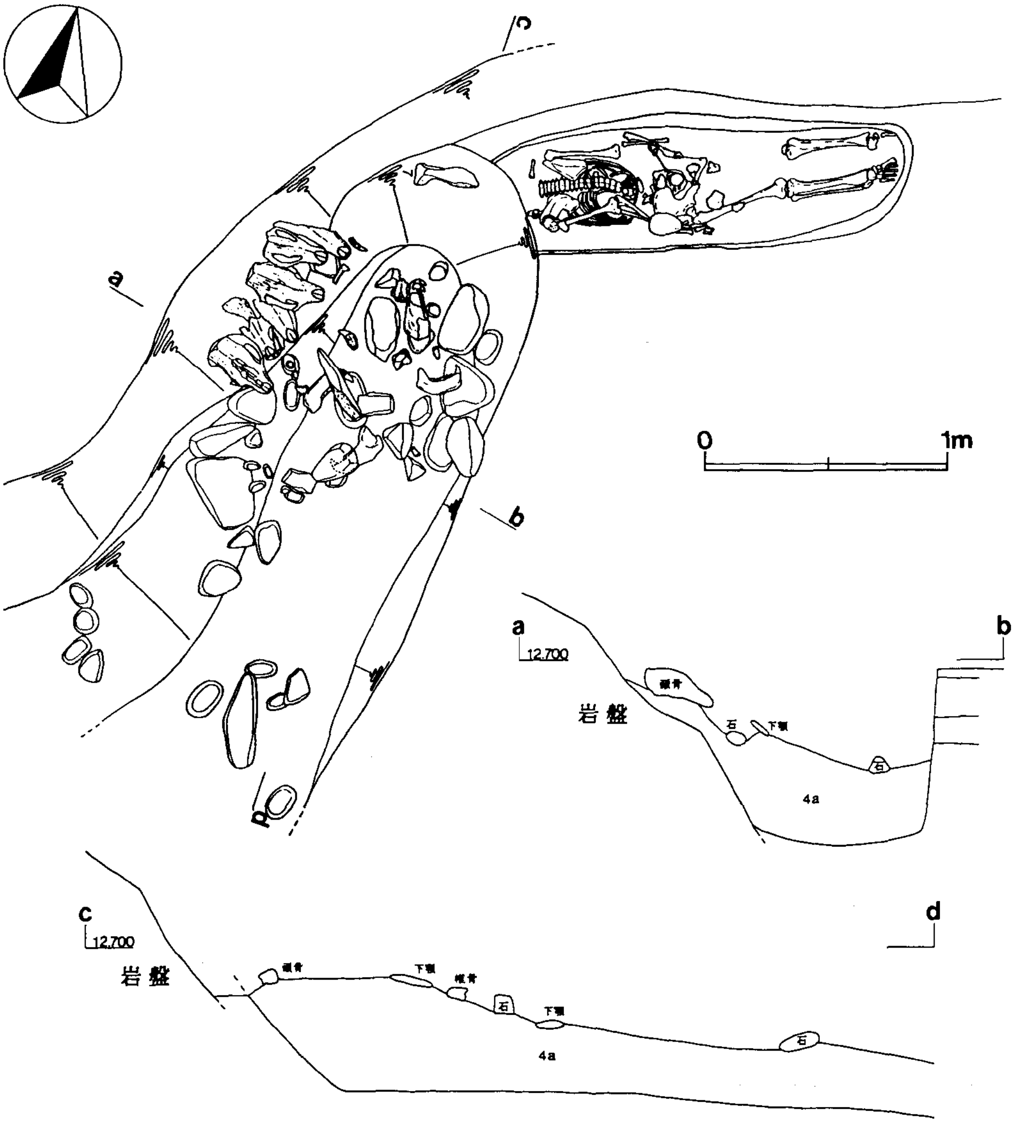


図4　オタフク岩洞窟におけるヒグマ骨の出土状況

限り，擦文文化期における当洞窟の性格は集落から離れたキャンプサイトであったと考えられる。

（2） 資料の出土状況

ヒグマの骨は，擦文文化期の包含層中に多く見られ，特に洞窟内西側の岩壁際に掘り込まれた土壙の覆土上層から中層にかけて集中的に検出された。中でも，頭蓋骨［上顎骨を含む］は，西側の岩壁に沿って6体，北側にやや離れて1体，一様に顔面を東側に向け一列に配列された状態にあった（図4・図版2）。また，この頭蓋骨列のやや東側からは下顎骨や遊離歯および椎骨や指骨などが出土したが，それらは概して頭蓋骨よりも低い位置にあった。このことは頭蓋骨が他の骨に比べ土中に埋没しにくい状態にあったことを示すものと言える。そうした状態を作り出す具体的な安置方法としては，地上に何らかの施設を設けその上に頭骨を掲げていたことが考えられよう。ただし，元来は頭蓋骨に伴うべき下顎骨が欠落し，幾らか早く埋没していることを見ると，頭骨の支持は極簡易になされていたのではないかと推測し得る。

（3） 出土部位と内容

土壙内から出土したヒグマ骨の部位と内容は表2に示した通りである。頭部の骨は破片総数にして33点出土しており，このうち，頭蓋骨と下顎骨，遊離犬歯については個体識別を行い，観察所見を表3にまとめた（図版3・4参照）。上顎骨で見ると，個体数は10体認められ，うち5体は犬歯各部位の計測値（図5・表4）と骨体の大きさが小さいことから雌と査定した。一方，頭部以外の骨は，破片総数にして31点出土した。胴部を構成する椎骨は，第一頸椎，胸椎，腰椎，仙椎が各1点ずつと少なく，また，四肢骨は上腕骨，大腿骨，脛骨などの主要な骨が認められず，腓骨の破片1点のほかはすべて手先，足先の骨であった。手根骨ないしは足根骨が5点，中手・中足骨が11点，指骨が10点出土したが，これらの中には同一個体と見なし得る資料が多数あり，特に右中足骨については確実に1個体分が揃って

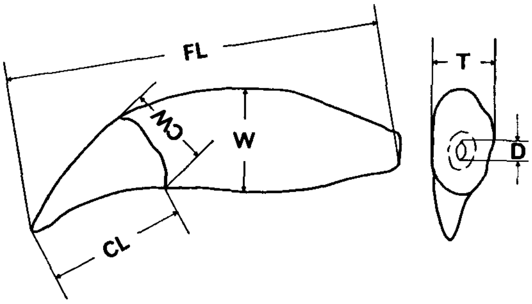


図5　犬歯の計測部位

表2　オタフク岩洞窟の土壙出土ヒグマ骨

部　位	内　容
頭　骨	Sk.3(2), Max. L8・R8, Man. L3・R1, I^2. R?1, I^3. R2, 上C. L1・R1, M^1. R1, M^2. R1, I_3. L1
椎　骨	At.1, Ve.3
四肢骨	Fib. (1), Om.5, Mc or Mt.1, McIII.L2, McIV.L1, MtI.R1, MtII.R1, MtIII.R1, MtIV. L1・R1, MtV.R2, PhI.5, PhII.4, PhIII.1

註　Sk：頭蓋骨，上C：上顎犬歯，At：第一頸椎，Ve：椎骨，Fib：腓骨，Om：手根骨または足根骨，Mc：中手骨，Mt：中足骨，Ph(I II II)：指骨(基節骨・中節骨・末節骨)。Mc・Mtの後ろのローマ数字は第何番目に当たるかを示す。その他の表記法は表1に準ずる。

表3　オタフク岩洞窟出土ヒグマ頭骨観察所見

No.	性別	保存	残存部位	備考
1	雄	良	Sk.［ほぼ完存］	頭頂骨左側に穿孔［(32＋α)×29mm］あり。
			Max. L $(XXXCXXXP^4M^{12})$	歯の摩滅なし。
			Max. R $(XXXCXXXP^{34}M^{12})$	骨体は大型。
2	雄	不良	Sk.［頭頂骨なし］	歯の摩滅少しあり。
			Max. L $(XXXCXXXP^4M^{12})$	
			Max. R $(XXXCXXXP^4M^{12})$	
3	雄	良	右下顎関節窩	左P^1は欠歯。
			Max. L $(XXC\ XXP^4M^{12})$	歯の摩滅なし。
			Max. R C＋ (XP^4M^{12})	
4	雄	良	Max. L $(XXXCX\ XP^4M^{12})$	P^2は欠歯。
			Max. R $(XXXCX\ XP^4M^{12})$	P・M及び左Cの保存は不良。
				No. 6と同一個体の可能性あり。
5	雄	良	C［Max. R］のみ	
6	雄	良	Man. L $(XXXCP_1\ P_4M_{123})$	P_{23}は欠歯。
				歯の摩滅少しあり。
				歯は大きいが，骨体は小型。
7	雄	良	Man. L［C歯槽部破片のみ］	焼骨。
8	雄	良	Man. L $(XXI_3CX\ P_4M_{123})$	左P_{23}，右P_2は欠歯。
			Man. R $(XI_{23}CX\ XP_4M_{123})$	歯は小さいが，骨体は大型。
9	雌	良	Max. L $(CXXXP^4M^{12})$	
			Max. R $(XXXCXXXP^4M^{12})$	
10	雌	不良	Sk.［破片］	左P^2は欠歯。
			Max. L $(XXXCX\ XP^4)$	
			Max. R $(XXXX)$ ＋ (XM^{12})	
11	雌	良	Max. L (M^{12})	No.10とは別個体。
12	雌	不良	Sk.［骨粉］	M^2が小さい。
			Max. L (P^4M^{12})	
			Max. R (P^4M^{12})	
13	雌	良	Sk.［ほぼ完存］	頭頂骨右側面に穿孔［53×30mm］あり。
			Max. L $(CXXXP^4M^{12})$	歯の摩滅殆どなし。
			Max. R $(CXXXP_4M^{12})$	

註　Sk：頭蓋骨，Max：上顎骨，Man：下顎骨，I：切歯，P：前臼歯，M：後臼歯，L：左，R：右，I・P・Mの後ろの数字は第何歯であるかを示し，Xは歯槽の存在を示す。

いる。中手・中足骨から推定される最小個体数は，僅か2個体に過ぎない。これらの椎骨や四肢骨は，表3に識別したいずれかの個体に伴うと考えられるが，推定される最小個体数が頭骨の数と比べ著しく少ない点が注目に値する。このことは胴部や四肢の骨が頭骨ほど頻繁には洞窟内に安置されなかったことを示す証左と言えよう。

（4）頭蓋骨の加工

出土した頭蓋骨のうち頭頂部を観察し得た2体（表3 No. 1・13）には，いずれも頭頂骨側面に長径 5 cm 前後の楕円形の穿孔が1つ認められた。しかも，興味深いことに，その位置は雄の個体では左側，雌の個体では右側と異なっていた(図版5)。これらの穿孔は，無論，脳髄を取り出

表4　犬歯の計測値と性別判定

(単位：mm)

No.	計測歯	全長 (FL)	歯冠長 (CL)	歯冠幅 (CW)	歯根幅 (W)	歯根厚 (T)	歯根開 (D)	性別
1	Max. R	70.8+α	28.5+α	20.5	25.5	17.2	0.0	♂
2	Max. R	87.8	30.8	18.4	29.0	16.5	0.0	♂
3	Max. L	90.6+α	29.0+α	18.8+α	28.3	16.3	0.0	♂
4	Max. L	80.7+α	27.2+α	20.8	26.3	16.5	10.4	♂
5	Max. R	87.0	32.0	21.4	29.1	17.2	8.0	♂
6	Man. L	81.3	33.9	21.5	25.7	16.3	10.6	♂
8	Man. L	84.1	29.3	21.4	27.7	15.5	0.0	♂
9	Max. R	75.2+α	26.6+α	17.5	21.5	13.7	4.3	♀
10	Max. L	72.8+α	22.4+α	15.9+α	21.7+α	13.5	0.0	♀
13	Max. L	56.0+α	11.3+α	15.9	18.6	12.0	7.0	♀

註　No.は表と対応する。Max. は上顎犬歯，Man. は下顎犬歯，L・Rは左右を表す。

すという実利的な目的から施されたと考えられるが，頭蓋骨全体を叩き割らず敢えて入念に穿孔を施した点に，破壊を最小限にとどめようとする意図が窺われ，その行為自体が儀礼の重要な一手順となっていたことを推測することができる。

(5)　椎骨と四肢骨の遺存状況

椎骨や四肢骨はすべて完存状態で検出され，頭骨のように何らかの加工が施されたり，人為的に破砕された痕跡を認めることはできなかった。このことは，これらの骨の中にある骨髄が利用されなかったことを意味する。現生北方狩猟民の多くには様々な動物の骨髄を利用する慣習が認められる一方，儀礼の対象となる特定種についてはその骨を破砕することが禁じられている例が少なくないことから，この点は注目に値する。(3)

(6)　死亡年齢と死亡時季

椎骨や四肢骨はいずれも骨端の癒着した成獣のものであった。また，頭骨についても歯の萌出交換状況等の観察から，すべて成獣であることが確認されたが，正確な死亡年齢と死亡時季を査定すべく，犬歯の遺存する10体について，犬歯歯根部のセメント層に形成された成長輪を生物顕微鏡で観察した(図版6)(4)。その結果，分析の対象とした個体はいずれも年齢が2.5歳以上であり，多くは初春の未だ越冬穴内にいる頃か越冬穴を出て間もない頃に捕殺されたものであることが判明した(表5)。査定の対象とした10体の中に2歳以下の幼獣が1体も含まれていなかったことは注目に値する。性査定の結果，出土資料の中には雌の成獣が5体含まれており，しかもそのうち死亡時季査定の対象とした3体がいずれも初春に捕殺されたことが明らかとなった。性成熟したヒグマの雌は越冬穴の中で出産を行うことから，これらの雌グマの捕殺時には生後間もない仔グマも獲得されていた可能性が極めて高いと考えられる。それにも関わらず，本洞窟からは幼獣が1体も出土しなかった。このことは本洞窟内で行われたヒグマ儀礼の対象から幼獣が意図的に

表5　死亡年齢・時季査定の結果

No	冬輪数	最外輪観察所見	備　考	年　齢	死亡時季
1	2	夏輪形成完了	夏輪は3本認められる。	3	秋～初冬
2	3	冬輪形成完了		4	初春
3	7	冬輪形成完了		8	初春
4	2?	冬輪形成中?		3?	冬?
5	1<	冬輪形成完了	最外輪以外は観察不可。	(2.5～3)	初春
6	2	冬輪形成完了		3	初春
8	3	夏輪形成途中		4	夏～秋
9	1<	冬輪形成完了	最外輪以外は観察不可。	(2.5～3)	初春
10	7	冬輪形成完了		8	初春
13	2	冬輪形成完了		3	初春

註　No.は表3に対応する。No.5・9については，正確な年齢を査定し得なかった。(　)内は犬歯歯根の伸長などから推定し得るおよその年齢である。

除外されていたことを示す証左と言える。

2　オタフク岩洞窟のヒグマ儀礼

前章に示した考古学的情報から，擦文文化終末期，オタフク岩洞窟を利用した人々は，ヒグマ儀礼に際し以下のような行為を慣習としていたと推測することができる。

① 集落から離れた場所では，洞窟（岩陰）を儀礼の場として利用する。

② 頭骨を何らかの施設に配列・掲揚する。

③ 頭骨のみを安置することが多く，他の骨を稀にしか安置しない。

④ 頭蓋骨については，頭頂骨側面に楕円形の穿孔を1つ施し，その位置を雄は左側，雌は右側と区別する。

⑤ 椎骨や手先・足先の骨についても破砕を禁忌し，丁重に扱う。

⑥ 主に春に捕獲した成獣を対象とし，2歳未満の幼獣を対象から除外する。

ここでは，擦文文化のヒグマ儀礼と，オホーツク文化のヒグマ儀礼，アイヌの「クマ送り」との系統関係を論ずるに先立ち，上記した各行為をオホーツク文化の考古学的事例とアイヌの民俗事例に照らし検討していきたいと思う。

(1)　洞窟・岩陰の利用

オホーツク文化には，ヒグマをはじめ儀礼の対象とした様々な動物骨を集積する慣習があったと考えられる。集落址，特に竪穴住居址内部の壁際には獣骨の集積が検出されることが多く，考古学では一般にそれを骨塚と称している。この骨塚は，礼文島や宗谷方面では屋外にも検出された例があるが，洞窟内で検出された例は今のところ報告されていない。ただし，従来，該期の遺跡調査がほぼ集落址に限定されてきたことを考えると，現段階で，オホーツク文化の人々がヒグ

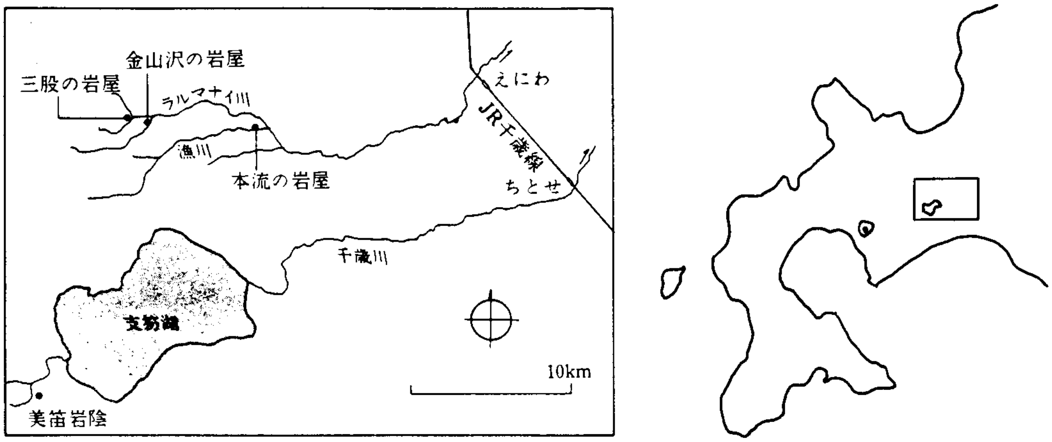


図6　美笛岩陰及び漁川上流の岩屋群の位置（宇田川　1989）

マ儀礼に際し洞窟を利用することがあったか否か即断することはできない。

これに対して，北海道アイヌの人々には，岩陰をクマの「送り場」に利用していた事例が知られている。周知の通り，北海道アイヌの「クマ送り」では，飼育グマはすべてコタン（kotan＝集落）で送られるが，狩猟グマは必ずしもそのすべてがコタンで送られるとは限らない。北海道アイヌの人々は，狩猟グマを捕獲場所がコタンから遠い場合には狩猟先で送ることを常とし（名取 1966），猟場がコタンから遠く離れたところにあった地域では，しばしばそこにも恒久的な「送り場」を設けていた（犬飼・名取 1964a）。そして，そのような狩猟先の「送り場」には，千歳市美笛岩陰（大谷・田村 1984）や恵庭市漁川上流の岩屋群（上屋 1984，天野 1986，図6参照）など[(5)]をはじめとして，洞窟や岩陰を利用したものが多く見られる。河川上流部と海岸部の違いこそあれ，同じ凝灰岩体の洞窟や岩陰を儀礼場に選ぶ点で，オタフク岩洞窟を利用した擦文文化の人々と北海道アイヌの人々には共通性が認められる。

（2）　頭骨の配列・掲揚

オホーツク文化の遺跡ではヒグマの頭骨はその殆どが竪穴住居内部に形成された骨塚，中でも奥壁際の骨塚に検出される（天野 1975）[(6)]。そこでは，頭骨が概して顔面を住居入口に向け，整然と並べられた状態で出土することが多く，安置に際してはやはり配列がなされていたと推測することができる。ただし，骨塚から出土した頭骨には，上顎骨と下顎骨がしっかりと嚙み合った状態の資料が多く，この点でオタフク岩洞窟の資料と顕著な相違が認められる。このことは，頭骨が特に何らかの施設に掲揚されることなく，床面ないしは『低い板張りの台』[(7)]の上に直に安置されていたことを示唆するものである。オホーツク文化のヒグマ儀礼では，頭骨の配列は行われたが，掲揚は行われなかったと見てよいであろう。

一方，北海道アイヌの人々には，「クマ送り」に際し頭骨を配列・掲揚する慣習が認められる。彼らは，クマの頭骨を二叉の棒に刺し，それをヌササン（nussasan）と称す神聖な柵の上に並べ

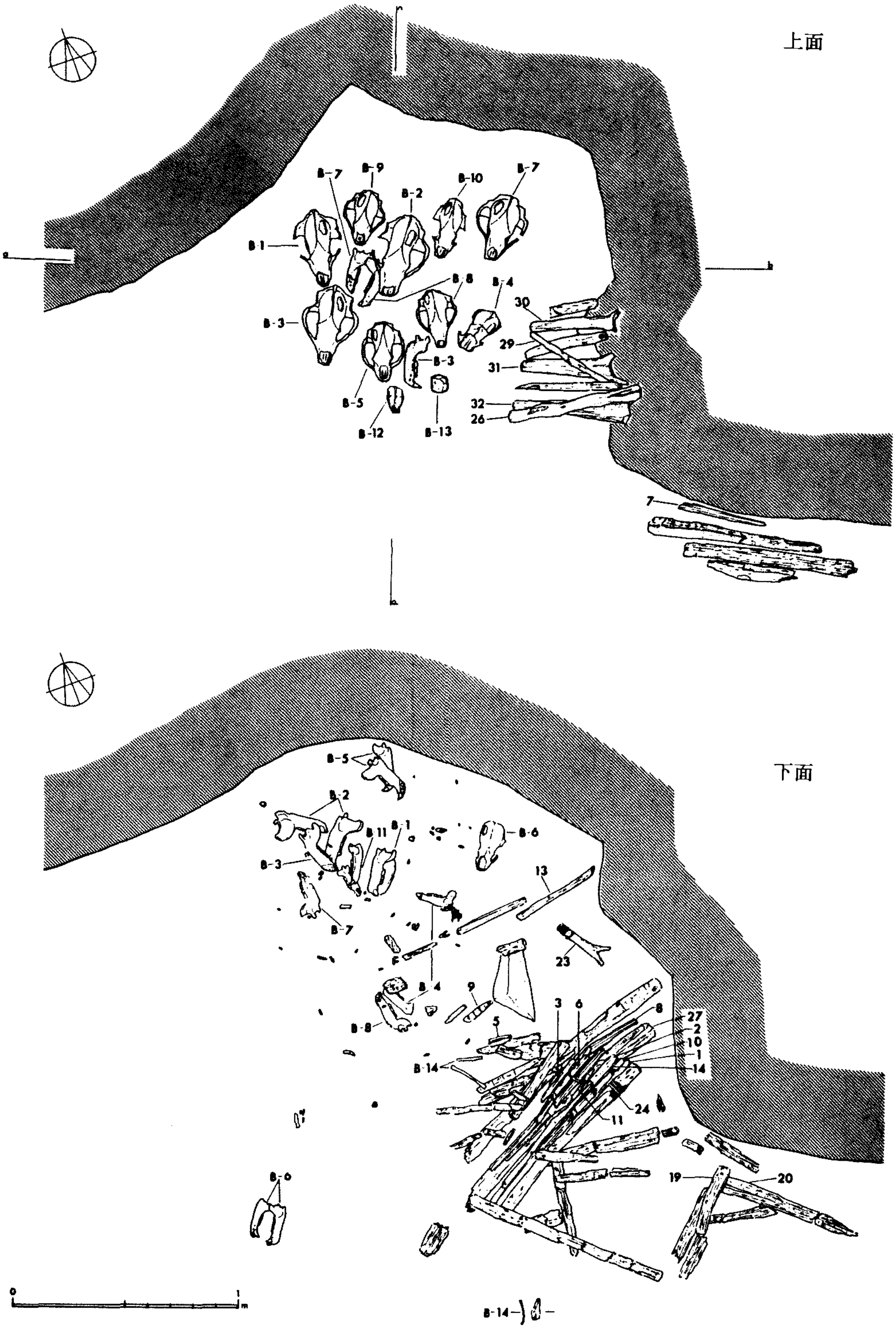


図 7　美笛岩陰におけるヒグマ骨の検出状況（大谷・田村　1984）

ることが「クマ送り」には不可欠と考えており，それ故，コタンのみならず狩猟先で「送り」をする際も，その行為を実践することに固執していたようである。先述した漁川上流の岩屋群のうち，本流の岩屋では，今も尚，岩壁際に沿ってヌササンが遺存しており，その上に頭骨が並べて掲げられている状況を見ることができる（天野 1986)。また，千歳町美笛岩陰では，調査時に既にヌササンが崩壊し，頭骨は多量の木製品やイナウ（inau＝木幣）とともに地上に落下した状態にあった。注目すべきは，ここでも概して下顎骨が頭蓋骨に先立ち埋没する状況が認められたことである（図7，大谷・田村 1984)。オタフク岩洞窟ではまさにこれと酷似した検出状況が見られたことから，擦文文化のヒグマ儀礼には，北海道アイヌの「クマ送り」と極めて近似した頭骨の安置形態が存在したと推測し得る。

（3） 頭骨に偏る安置

オホーツク文化の竪穴住居址に検出されるヒグマの骨は，必ずしも頭骨だけではない。頭骨のほぼ一定した安置場所である奥壁部の骨塚にも，頭骨に加え四肢や胴部の骨を集積したり，あるいは，頭骨を全く集積せず四肢や胴部の骨のみを集積している住居址があり(8)，また，奥壁部以外にも入口部や左壁部に骨塚を設け，そこに四肢骨をまとめて集積している住居址も認められる(9)。1つの骨塚ひいては住居址内に，クマ1頭分の骨がまるごと集積された例こそ稀であるが，オホーツク文化の人々は少なくとも集落では，頭骨のみならずすべての部位骨を安置していたことは確実である。

一方，北海道アイヌの人々も，コタンでクマを送る場合には頭骨以外の骨も最終的にすべて住居東側に構築されたヌササンの前に安置している。しかし，その反面，彼らはコタンから離れた狩猟先でクマを送る場合，「送り場」には頭骨のみを安置し，他の部位骨は肉とともにコタンに持ち帰ることを通例としていたようである。美笛岩陰や漁川上流の岩屋群に安置された骨の部位構成はそのことを裏付けている。美笛岩陰では13個体分の頭骨が検出されたが，胴部や四肢の骨は僅かに1個体分，破片数にして6片が認められたに過ぎない（門崎 1984)。本流の岩屋でも頭骨は最小9個体分あるのに対し，四肢骨は僅かに1個体分が認められるのみである（天野 1986)。さらに，三股の岩屋，金山沢の岩屋に至っては，頭骨以外の骨は全く検出されていない（上野 1984)。安置する部位が頭骨に著しく偏る点において，オタフク岩洞窟のヒグマ儀礼は，北海道アイヌが狩猟先で行う「クマ送り」と近似している。

（4） 頭蓋骨に対する穿孔慣習

出土資料の観察により，オホーツク文化にも儀礼の対象とした様々な動物の頭蓋骨に穿孔を施す慣習が存在したことは確実であるが，その方法は，オタフク岩洞窟の資料に認められるそれとは異なっていたようである。遺存状況が良好であった礼文島香深井A遺跡を例にとると，骨塚に集積されたヒグマ頭蓋10例中5例の頭頂骨側面に真円形ないし楕円形の穿孔が施され，このうち，

確実に雄と判断できる頭骨2例はいずれも左右両側面，性を判別し得ない3例のうち2例は右側面のみが穿たれていた。同遺跡ではさらにヒグマ以外にオットセイの頭蓋骨にも雄の場合やはり左右両側面に穿孔が施されていたことから，オホーツク文化には雄は頭頂骨の左右両側，雌は右側のみを穿孔する慣習があったと考えられている（天野 1975）。雄に対して左右両側に計2個の穿孔を施す方式は，オタフク岩洞窟のそれとは明らかに異なるものである。

一方，アイヌの人々にもクマをはじめ「送り」の対象とする様々な動物の頭蓋骨に穿孔を施す慣習が知られる。アイヌの人々は，頭蓋骨をヌササンに掲揚するに先立ち，それを必ず飾り立てる作業を行い，その際なかの脳髄をとりだすべく穿孔を1つ施す。この穿孔の形状は一般に長径5 cm 前後の楕円形で，またその位置は雄ならば頭頂骨の左側面，雌ならば右側面と明確に区別されている。オタフク岩洞窟の資料に認められた穿孔の方式は，まさにこのアイヌの方式と一致している。

（5） 胴部や四肢の骨に対する破砕禁忌

頭蓋骨に対する穿孔慣習の存在等から，オホーツク文化の人々が，儀礼の対象とした動物の頭骨について，破壊を最小限にとどめようとしていたことは確実である。しかし，頭骨以外の胴部や四肢の骨については，出土資料を見る限り，たとえクマの骨であろうと特別な配慮がなされていた形跡は認められない（天野 1975）。礼文島香深井A遺跡（西本 1981a）や常呂町栄浦第二遺跡（金子 1972）などでは，徹底的に打ち割られたクマの四肢骨が多数出土しており，骨髄が積極的に利用されていたことが窺える。オホーツク文化のヒグマ儀礼には，頭骨以外の骨に対する明確な破砕禁忌はなかったと見てよいであろう。

一方，北海道アイヌの人々にもクマの骨髄を食する事例は認められる。サハリンアイヌの人々がクマの骨を傷つけることを忌み嫌い，その骨髄を利用することを堅く禁じている（渡辺 1977）のに対し，北海道アイヌにはそれほど徹底した禁忌は認められない。しかし，北海道アイヌの人々にも，骨髄を取り出す際に一定の配慮をしたり，特定の部位骨については破砕を禁じたりする慣習は多々見られる。北海道東部地域にはそのような慣習が特に顕著であり，釧路方面における聴取調査では，手足の骨はそのなかの骨髄を取り出す場合にも叩き壊さず，必ず二つ割りにするとか，手足・足先については肉は食べてもその骨を折らないなどの情報も得られている（渡辺ほか 1986）。同じ北海道東部地域に立地するオタフク岩洞窟のヒグマ儀礼で，手先・足先の骨が丁重に扱われていたことを考えたとき，これらの情報は極めて興味深い。頭骨以外の骨の処理という点でも，オタフク岩洞窟のヒグマ儀礼は，オホーツク文化のそれよりもむしろアイヌの「クマ送り」と共通性が認められる。

（6） 儀礼の対象と時季

オホーツク文化の集落址に検出されたヒグマの死亡年齢・時季については，礼文島香深井A遺

表6　死亡時季（月）・年齢構成の比較

① 香深井A遺跡

満年齢＼時季	春	夏	秋	冬	計
0		？1	雄1，？5		7
1		雌(1)			(1)
2	雄(1)，雌1，？1				3
3	雄2，？(1)				2(1)
4					0
5≦	雄4，雌2(1)，？1(1)				9
計	12(3)	1(1)	6	0	23

② オタフク岩洞窟

満年齢＼時季	春	夏	秋	冬	計
0					0
1					0
2					0
3	雄1(1)，雌1(1)		雄1	雄(1)	3(3)
4	雄 1	雄1			2
5≦	雄1， 雌1				2
計	7	1	1	(1)	10

③ 美笛岩陰

満年齢＼月	3・4	5・6	7・8	9・10	11・12	1・2	計
0							0
1							0
2	雄1，雌2	雄1					4
3							0
4							0
5≦	雄1，雌2	雄2，雌3					8
計	6	6	0	0	0	0	12

註　？：性別不明，(　)内は断定できないが可能性の強い個体の数を示す。尚，①②③はそれぞれ，大井・大泰司・西本 1980，西本・佐藤 1991，門崎 1994の査定結果を基に作成した。

跡の出土資料に対して査定が試みられており，春に死亡した成獣や亜成獣に加え，秋に死亡した当歳の個体が含まれていたことが報告されている（表6①参照，大井ほか 1980)。この結果から，オホーツク文化の人々は少なくとも集落では春に捕殺した成獣・亜成獣に加えて約半年間飼育した幼獣も儀礼の対象としていたことが明らかであるが，集落から離れた洞窟で成獣のみを対象とした儀礼を行うことがあったか否かは定かではない。

これに対して，北海道アイヌの人々には，狩猟先では成獣や亜成獣のクマだけを送ることが知られている。彼らは，主に春と秋にクマ猟を行い，その折に獲た成獣・亜成獣のクマを捕殺場所に応じてコタン，狩猟先のいずれの「送り場」にも送る。しかし，その一方で，雌グマの捕殺に

伴い仔グマを生け捕った場合には，どれ程離れた狩猟先であってもその場ですぐには送らず，必ずコタンに連れ帰り1～2年程飼育した後，冬に「飼育グマ送り」の対象とする。その結果，コタンの「送り場」には狩猟で獲た成獣や亜成獣と飼育された幼獣の両者の骨が安置されるのに対し，コタンから離れた狩猟先の「送り場」には成獣や亜成獣の骨のみが安置されることとなるのである。恵庭市漁川上流部の岩屋群に安置されている頭骨の年齢構成を見ても，本流の岩屋では成獣ないし老獣が雌雄各3体と亜成獣が雌雄各1体（天野 1986)，金山沢の岩屋では3歳の雄が1体のみ，三股の岩屋では7～8歳の雄，3～4歳の雌，2～3歳の性別不明の個体が各1体ずつとなっており，いずれの岩屋にも2歳未満の幼獣は認められない（上屋 1984)。また，千歳市美笛岩陰に検出されたヒグマについては，香深井A遺跡やオタフク岩洞窟とほぼ同様な方法によって死亡時季・年齢査定が試みられ，結果が報告されている（門崎 1984)。これによれば，検出された13体のうち，犬歯の遺存している雄5体，雌7体はいずれも年齢が2歳以上で，3月から6月までに捕殺された個体であった（表6③参照)。2歳未満の幼獣が含まれず，捕殺時季が春に集中する点で，オタフク岩洞窟に検出された個体群の構成は，北海道アイヌが狩猟先で送っていたものと近似している。

3 「クマ送り」の系統

前章の検討により，擦文文化終末期，オタフク岩洞窟で行われたヒグマ儀礼の形態は，オホーツク文化のヒグマ儀礼よりも，むしろアイヌの「クマ送り」，特に北海道アイヌが狩猟先で行う「狩猟グマ送り」に近いことが明らかとなった。このことは，単に擦文文化のヒグマ儀礼と北海道アイヌの「狩猟グマ送り」との現象面の類似を示すにとどまらない。儀礼はそれを行う人々が保持する観念の具現化であり，その中で慣習となり固執される行為には，それぞれに意味が付与されている。従って，ある儀礼で重視され必ず実践される諸行為を他の儀礼にも見いだし得る場合，それぞれの儀礼を挙行する人々の間に，共通の観念が保持されている可能性が示唆されることとなるのである。

民族誌の情報によれば，「クマ送り」において，頭蓋骨に穿孔を施す行為は，ウンメムケ（u-mmemke）と称される頭蓋骨を飾る手順のなかで行われ，また，飾られた頭骨をヌササンに掲げる行為は，ウンメムケの後ケオマンテ（kewomante＝霊送り）のなかで行われる。アイヌの人々は，これらの手順がつつがなく行われることではじめてクマの霊が神の国（あるいは親元）へ戻った時面目を果たすことができると信じており，それ故，クマを送る場合，それが飼育グマであれ，狩猟グマであれ，また「送り場」がコタンであれ狩猟先であれ，頭蓋骨を穿孔し掲揚する行為を決して欠かすことはないのである。

もちろん，オホーツク文化のヒグマ儀礼にも，頭蓋骨の安置に際して何らかの手順が存在した可能性は充分に考えられる。前章で述べた通り，頭蓋骨を穿孔し，それを配列するというレベル

では，オホーツク文化のヒグマ儀礼，擦文文化のヒグマ儀礼，アイヌの「クマ送り」の三者には共通性が認められる。しかし，その行為をより詳細に比較検討した場合，後二者とは異なり，オホーツク文化のヒグマ儀礼には，雄雌で左右を区別して頭蓋骨を穿孔したり，それをなんらかの施設に掲揚する行為が認められない。そして，これらの行為の有無にこそ，オホーツク文化の人々と擦文文化，アイヌの人々との保持する観念の相違を見いだすことができるのである。

頭頂骨を雄雌で左右区別したり，それを掲揚する行為に如何なる意味があるかを，実際にアイヌの人々から聴取した例は少ない。また，数少ない聴取された情報も漠然としたものであることから，アイヌの人々自身ももはやその本来的な意味を認識していないと見るべきかもしれない。しかし，その内容はともかくとして，ある行為に重要な意味が付与されているか否かを，私たちは，その行為の実践が如何に固執され，慣習化されているかによって知ることはできる。

雄雌で穿孔の位置を左右区別することを，美幌アイヌの人々は，クマが越冬穴を掘るとき，雄は左方に雌は右方に土を掻き出すからと説明しているが（犬飼 1935），そのようなクマの動作を頭蓋骨の穿孔位置に反映させることの意味は明らかではない。しかし，「クマ送り」のなかには，頭蓋骨の穿孔位置ばかりではなく，雄雌あるいは男女によって左右が区別される事例が多数認められる。例えば，標茶の虹別シュワンコタンでは，クマの胆を取り出す際，雄なら左の横腹，雌ならば右の横腹を裂き，十勝の伏古村や平取の二風谷では，頭骨を支える二叉の棒の先端に結び付けるイナウを雄の場合左側，雌の場合右側をそれぞれもう一方よりもいくらか高くすることが知られる（犬飼・名取 1964b，伊福部 1969）。さらに，十勝の伏古村では，「飼育グマ送り」でいったん家のなかに安置したクマの頭に供物を捧げる際，男はその左側，女は右側に多く供え，同時に酒杯に載せるイクパスイ（iku-pasui＝捧酒箸）の向きも男女によって左右を違えることが報告されている（犬飼・名取 1964b）。これらの事例から，私たちはアイヌの人々が雄雌，男女と左右の区別を結び付けることに如何に固執しているかを窺うことができ，その行為に本来何らかの重要な意味が付与されていたことを察知し得るのである。

また，頭蓋骨を掲揚する行為は，アイヌの人々がクマの霊魂が頭蓋骨中に宿っていると信じていることに関係しているという（Batchelor 1901）。霊魂の在所であることがなぜ掲揚する行為に結びつくかは不明であるが，通常使用している「送り場」から遠く離れた場所でクマを獲た場合にも，そこに新たなヌササンを構築したり，あるいは他のアイヌの「送り場」が近くにあれば，そのヌササンを臨時に利用してまでも頭蓋骨を掲揚することに固執する（犬飼・名取 1964a）ことを考えれば，その行為に重要な意味が付与されていることは確実である。

本稿では，これらの行為に付与された意味内容の解釈には立ち入らない。しかし，「クマ送り」に際し，アイヌの人々がその実践に固執し，明らかに重要な意味を付与している行為を，オタフク岩洞窟のヒグマ儀礼に１つのみならず複数見いだせたことは，もはや単なる現象面での類似とは見なし難い。このことは，当洞窟を利用した擦文終末期の人々がアイヌの人々と近似した観念を保持し，彼らのヒグマ儀礼がアイヌの「クマ送り」とほぼ一致した形態をもっていたことを示

唆する。そして，このように考えた時，アイヌの「クマ送り」は，系統的には，オホーツク文化よりも，擦文文化のヒグマ儀礼にはるかに近い関係にあったと言えよう。

はじめにも述べた通り，「クマ送り」の系統は，従来，オホーツク文化のヒグマ儀礼との関係で論じられることが多かった。渡辺仁は，クマに対する信仰と儀礼に関連する事項のうち，(1)クマその他の獣骨の屋内集石，(2)クマの影像の制作・使用，(3)クマ祭用仔グマの装束としての腹帯の3つがアイヌ文化とオホーツク文化に共通して認められることを指摘した上で，アイヌの「クマ祭の信仰儀礼体系の源流は，あくまでも北方文化に根ざすものであり，最も直接的にはオホーツク文化の流れを汲む」との見解を示している（渡辺 1974）。しかし，渡辺自身も指摘しているように，上記した三事項をすべて認め得るのは，アイヌの中でもサハリンアイヌに限られ，北海道アイヌにはせいぜい(1)の獣骨集積が一時的に見られるに過ぎない。北海道アイヌの「クマ送り」とオホーツク文化のヒグマ儀礼には，その中で行われる行為に類似よりもむしろ相違が目立つことは否めず，この点で大井晴男がサハリンアイヌのみの事例を「北海道にまで広げて考えることは誤りではないか」（大井編 1977）と批判するのはもっともと言えよう[(10)]。

また，菊池徹夫は，特に北海道東北部においてはアイヌ文化の母胎として，擦文文化よりもオホーツク文化を重視すべきであるとの持論を展開する過程で，ヒグマに関する信仰・儀礼は擦文文化からアイヌ文化に直接結びつかない文化要素の1つであると度々主張している（菊池 1977・1990）。しかしながら，オタフク岩洞窟で行われたヒグマ儀礼を検討した限り，筆者は，擦文文化期のヒグマ儀礼は，むしろオホーツク文化のそれ以上に，北海道アイヌの「クマ送り」へ直接かつ無理なく結びつくと考えざるを得ない。儀礼の源流が北方起源のオホーツク文化のヒグマ儀礼にたどれるか否かはともかく，民族誌に知られる北海道アイヌの「クマ送り」は，北海道在地文化の担い手たる擦文文化の人々によってその基本形態が形成されたと考えるべきであろう。

おわりに――今後の課題――

以上，オタフク岩洞窟の資料を分析し，擦文文化終末期のヒグマ儀礼が民族誌に知られる北海道アイヌの「クマ送り」とかなり近い形態をもっていた可能性を指摘した。また，その上で，民族誌に知られる「クマ送り」の基本形態はあくまでも擦文文化の内部で形成されたとする自身の見解を述べた。果たしてそう考えた場合，擦文文化期に飼育グマを対象とした儀礼が行われていたか否かが重要な問題として残されることとなる。渡辺仁が指摘するとおり，仔グマ飼育型ヒグマ儀礼の確立は「アイヌ文化の宗教的基盤の成立」を示すものであり（渡辺 1972），アイヌ文化そのものの形成を考えるうえで重要な意味をもつからである。

仔グマ飼育型ヒグマ儀礼の成立時期については，現在，研究者間に見解の相違が認められる。例えば石川直章は，「イオマンテに代表される『熊祭』を検証できるのは」18世紀中頃以降であり，「『熊祭』の完成は『送り場』の分析による限りかなり新しい」と主張している（石川 1988）。

また，宇田川洋も，石川とほぼ同様の資料を集成・分析し，「“仔グマ飼育型クマ祭”の確立」を18世紀末以降に求めている（宇田川 1989)。これに対し，西本豊弘は『蝦夷談筆記』(松宮観山 1710）等，18世紀初めに編纂された文献に既に記載が認められるにも関わらず，その成立年代を18世紀以降とするのはあまりにも考古資料に忠実でありすぎると批判し，仔グマ飼育は「おそくともオホーツク文化と同時代の擦文文化期」には始まり，14・15世紀～17世紀中頃には「『仔グマ飼育型クマ送り』儀礼が成立していたのではなかろうか」と推測している（西本 1990)。

オタフク岩洞窟の資料は，これらの議論に直ちに結論を与えるものではない。しかしながら，擦文文化期における当洞窟の性格は集落から離れたキャンプサイトであった可能性が高く，そこで行われたヒグマ儀礼の形態が，アイヌの人々が狩猟先で行う「狩猟グマ送り」と多くの点で一致することを考えたとき，儀礼の対象に幼獣が含まれていないことは極めて示唆的に思える。先に述べたとおり，当洞窟には初春に捕獲された雌の成獣が少なくとも３体以上含まれていた。性成熟した雌グマは越冬穴の中で出産を行うことから，これらの雌グマの捕殺時には生後間もない仔グマも獲得されていた可能性が極めて高いと考えられる。それにも関わらず，当洞窟の出土資料には幼獣は１体も認められなかった。このことは，擦文文化終末期の人々が明らかに仔グマを成獣と区別し，それを洞窟内における儀礼の対象から意図的に除外していたことを示す証左と捉えることができる。筆者は，そうした行為の実践は取りも直さず，該期，既に集落では仔グマの飼育と，飼育グマを対象とした儀礼が行われていたことを暗示するものではないかと考えている。すなわち，オタフク岩洞窟の出土資料に幼獣が認められなかったことは，仔グマが捕獲されていなかったことに起因するのではなく，生け捕りにされて集落に持ち帰られた為に生じたと解釈しているのである。この私見の当否は，今後集落址出土のヒグマ骨を充分に検討した上で論じる必要があるが，オタフク岩洞窟の資料により，擦文文化期に北海道アイヌの「狩猟グマ送り」と近似した形態をもつヒグマ儀礼の存在が確認された以上，該期にも仔グマ飼育と仔グマ飼育型ヒグマ儀礼が行われていた可能性は充分に考えられることを指摘しておきたい。

付記

オタフク岩洞窟の出土資料を分析する機会を与えて頂いた涌坂周一氏に衷心より謝意を表する次第である。また，西本豊弘先生には資料の分析について御指導を仰ぎ，幾度となく議論に応じて頂いた。更に，鈴木公雄先生，山口徹氏には草稿の校閲をお願いし，それぞれ有益な御助言を賜った。併せて御礼申し上げたい。尚，本稿は，1990・91年度，国立歴史民俗博物館大学院受託学生として研究した成果の一部である。

註

（１）　宇田川洋（1979・1980）の擦文晩期，菊池徹夫（1970）のＥ期，佐藤達夫（1972）のⅣ期後半，藤本強（1972・82）のＪ・Ｋ期，石附喜三男（1984）のⅣ期に比定されよう。

（２）　羅臼町においては擦文文化期の遺跡は集落址に限らず，その数自体が少ない。現在までに確認され

た70以上の遺跡の内，擦文文化期の遺物が多少なりとも採集されているのは，オタフク岩洞窟を除くと，北浜町ルサ川（図3 No.9，駒井編 1964），海岸町トビニタイ洞窟（同No.17），共栄町マツカウス洞窟（同No.31），本町忠魂碑（同No.40付近），知昭町坂本地点（同No.51），峯浜町峯浜チャシ竪穴群(同No.70付近)，オルマップ北岸（同No.72），植別川（同No.74，豊原・涌坂 1981）の僅か8遺跡に過ぎない。

(3) 渡辺仁（1977）は，北方文化に見られる動物儀礼を扱う場合，単に骨の集積状況だけでなく，骨の破砕状況についても検討する必要があると指摘している。

(4) 哺乳類，特に食肉類と偶蹄類では，歯のセメント層と象牙質及び歯槽骨などに成長輪が現れることが硬組織学の研究成果として明らかとなっている。ヒグマについても，歯根部セメント層に成長輪が認められ，これによって正確な年齢を査定し得ることが報告されており（米田 1976），その査定法は既に香深井A遺跡の考古学的研究にも応用されている（大井ほか 1980）。なお，オタフク岩洞窟の資料に対する分析手順の詳細は，別稿（西本・佐藤 1991）を参照されたい。

(5) これらの「送り場」は20世紀前半頃まで使用されていたと考えられる。なお，この他，中山峠や白老町の山中にも同様な「送り場」が存在するという（天野 1986）。

(6) オンコロマナイ貝塚（大場・大井編 1973）では屋外の骨塚，また，香深井A遺跡（西本 1981a），亦稚貝塚（西本 1978），栄浦第二遺跡（金子 1972）などでは，一般の貝層中からもヒグマの頭骨が検出されたが，これらの例はあくまでも稀であり，個体数も極僅かに過ぎない。また，住居址で奥壁部以外の骨塚にヒグマの頭骨が検出された例としては，唯一，栄浦第二遺跡4号竪穴が知られるのみである。

(7) このような施設が構築されていた可能性は，ウトロ砂丘1号竪穴で指摘されている（駒井編 1964）。

(8) 奥壁部の骨塚にヒグマの頭骨と四肢骨ないし胴部骨が一緒に検出された例は，目梨泊遺跡1・2・4号（大井ほか 1986），栄浦第二遺跡7号（金子 1972），モヨロ貝塚10号（駒井編 1964），弁天島1号（八幡・増田・岩崎編 1966）の各竪穴，四肢骨や胴部骨のみが集積された例は，栄浦第二遺跡4・11号竪穴（金子 1972）などに知られる。

(9) ヒグマの四肢骨が入口部の骨塚に集積された例は，目梨泊1号（大井ほか 1986），トコロチャシ1・2号，モヨロ貝塚10号（駒井編 1964），左壁部に集積された例としては栄浦第二遺跡4号（金子 1972），モヨロ貝塚7号（駒井編 1964）の各竪穴に知られる。

(10) オホーツク文化のヒグマ儀礼がアイヌの「クマ送り」に直接結びつかないとする見解は，この他，高杉博章（1987）によっても提示されている。

引用文献

天野哲也　1975 「オホーツク文化における動物儀礼の問題」『北大史学』15

〃　1986 「恵庭市漁川のクマ送り場」『環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼』北海道大学文学部

BATCHELOR, J.　1901 The Ainu and their Folklore, London.

藤本　強　1972 「常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』東京大学文学部

〃　1982 『擦文文化』教育社

HALLOWELL, I.A.　1926 Bear ceremonialism in the northern hemisphere, American Anthropologist, 28-1.

伊福部宗夫　1969 『沙流アイヌの熊祭』みやま書房

犬飼哲夫　1935 「アイヌの行ふ熊の解剖」『民族學研究』1－3

犬飼哲夫・名取武光　1964a 「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式㈠」『北方文化研究報告』2

〃　1964b 「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式㈡」『北方文化研究報告』3

石附喜三男　1984 「擦文式土器の編年的研究」『北海道の研究2』清文堂

石川直章　1988 「物質資料からみたアイヌ文化の様相―アイヌ文化成立についての覚書」『根室市博物館開設準備室紀要』2

門崎充昭　1984 「動物遺存体について」『千歳市美笛における埋蔵文化財調査』千歳市教育委員会（千歳市文化財調査報告書Ⅹ）

金子浩昌　1972 「栄浦第二，4，7，8，11，12号竪穴に伴う動物遺骸の概要」『常呂』東京大学出版会

〃　　1984「自然遺物」『神恵内観音洞窟』神恵内村教育委員会
菊池徹夫　1970「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」『物質文化』15
〃　　1977「オホーツク文化と擦文・アイヌ文化との関係」『シンポジウム　オホーツク文化の諸問題』学生社
〃　　1990「アイヌ史と擦文文化」『北からの日本史　第2集』三省堂
駒井和愛編　1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡　下巻』東京大学文学部
名取武光　1966「沙流アイヌの熊祭に於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告』4
西本豊弘　1978「動物遺体」『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
〃　　1981a「動物遺存体について」『オホーツク文化の研究3　香深井遺跡　下』東京大学出版会
〃　　1981b「須藤遺跡出土の動物遺存体」『斜里町文化財調査報告Ｉ』斜里町教育委員会
〃　　1989「「クマ送り」の起源について」『考古学と民族誌』六興出版
西本豊弘・宮　宏明　1989「北見市中ノ島遺跡の動物遺体について」『北網圏北見文化センター研究報告（考古学関係論文集Ｉ）』北網圏北見文化センター
西本豊弘・佐藤孝雄　1991「オタフク岩洞窟遺跡出土の動物遺体」『オタフク岩遺跡』羅臼町教育委員会（羅臼町文化財報告14）
大場利夫・大井晴男編　1973『オホーツク文化の研究1　オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会
〃　　1976『オホーツク文化の研究2　香深井遺跡　上』東京大学出版会
大井晴男編　1977『シンポジウム　オホーツク文化の諸問題―その起源・展開・社会・変容―』学生社
大井晴男・天野哲也・西本豊弘　1986「オホーツク文化における社会組織・その変遷―狩猟獣の捕獲・配分・儀礼との関係において―」『環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼』北海道大学文学部
大井晴男・大泰司紀之・西本豊弘　1980「礼文島香深井Ａ遺跡出土ヒグマの年齢・死亡時期・性別の査定について」『北方文化研究』13
大谷敏三・田村俊之　1984『千歳市美笛における埋蔵文化財分布調査』千歳市教育委員会（千歳市文化財調査報告書Ｘ）
佐藤達夫　1972「擦紋土器の変遷について」『常呂』東京大学文学部
澤　四朗編　1971『羅臼』羅臼町教育委員会（羅臼町文化財報告1）
高杉博章　1987「擦文文化における「物送り」の信仰・儀礼」『北海道考古学』23
豊原熙司・涌坂周一　1981『植別川遺跡』羅臼町教育委員会（羅臼町文化財報告6）
豊原熙司・涌坂周一編　1984『松法川北岸遺跡』羅臼町教育委員会（羅臼町文化財報告8）
宇田川洋　1979「'79年代擦文文化の研究」『季刊どるめん』22
〃　　1980「擦文文化」『北海道考古学講座』みやま書房
〃　　1989『イオマンテの考古学』東京大学出版会
上屋真一　1984『熊送り場所在確認調査報告書』恵庭市教育委員会
涌坂周一編　1991『オタフク岩遺跡』羅臼町教育委員会（羅臼町文化財報告14）
渡辺　仁　1972「アイヌ文化の成立―民族・歴史・考古諸学の合流点―」『考古学雑誌』58―3
〃　　1974「アイヌ文化の源流―特にオホーツク文化との関係について―」『考古学雑誌』60―1
〃　　1977「獣骨破砕禁忌。北方先史学に関する土俗考古学的諸問題」『人類学雑誌』85―4
渡辺　仁・西本豊弘・大島　稔・切替英雄・佐藤知己　1986『昭和60年度アイヌ民俗文化財調査報告書　アイヌ民俗調査Ｖ（釧路・網走地方）』北海道教育委員会
八幡一郎・増田精一・岩崎卓也編　1966『北海道根室の先史遺跡』東京教育大学文学部
米田政明　1976「エゾヒグマの年齢査定と齢構成」『哺乳動物学雑誌』7―1

（慶応義塾大学大学院文学研究科　国立歴史民俗博物館 大学院受託学生）

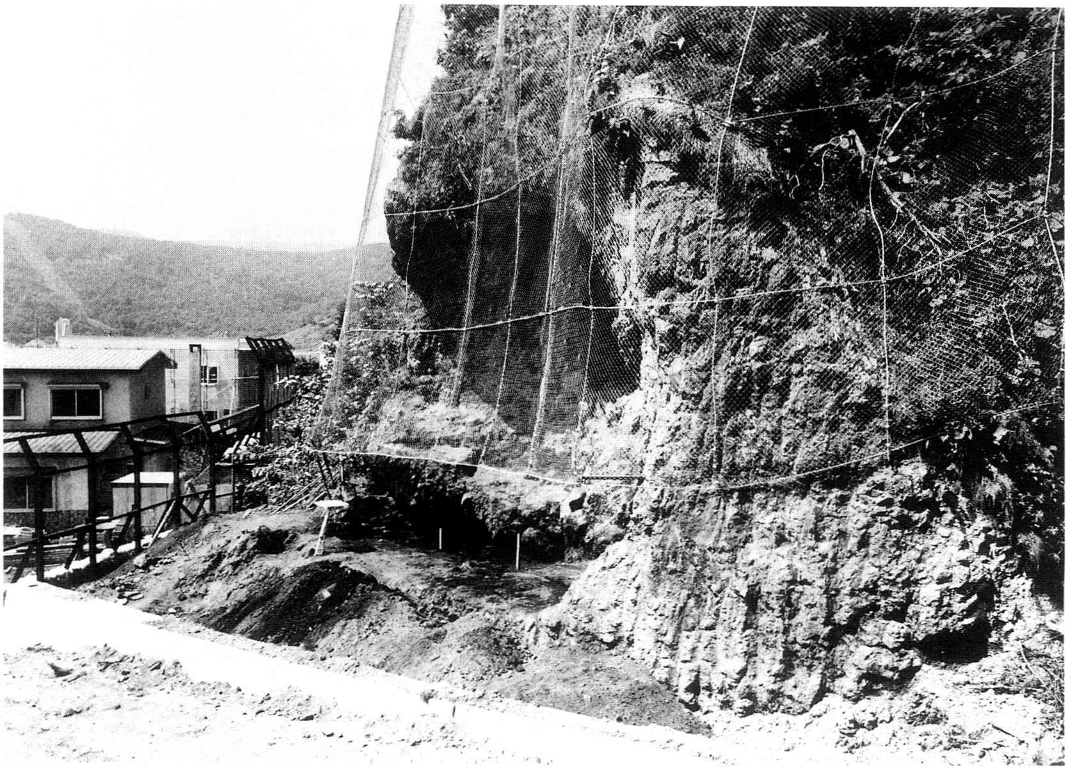
The Tradition of "Iwomante" in Ainu Culture
—With the Special Reference to the Brown Bear Ritual at the Otafuku-iwa Cave in Rausu, Hokkaidō—

SATŌ Takao

Discussing the tradition of "Iwomante" (the Bear Ritual in Ainu Culture), archaeologists have attracted much attention to the brown bear ritual of Okhotsk Culture than that of Satsumon Culture which was directly prior to Ainu Culture in Hokkaidō. This was affected by the fact that there was poor evidence of the brown bear ritual in Satsumon Culture, which restrictd the comparison of cultural continuity on the ritual between the Ainu and Satsumon Culture. Recent Archaeological resarch of Otafuku-iwa Cave in Rausu, Hokkaidō, however, cleared existence of the brown bear ritual in Satumon Culture. And zoo-archaeological analysis of the findings enabled to compare the brown bear ritual with "Iwomante" of the Ainu.

In this paper, firstly, I pointed out six features of acts included in the ritual were reconstructed from the excavated faunal remains. Then I compare each of these with archaeological evidence of Okhotsk Culture and ethnographical evidence of the Ainu. As a result, it becomes clear that these acts are much closer not to the brown bear ritual of Okhotsk Culture but to the Ainu in Hokkaidō.

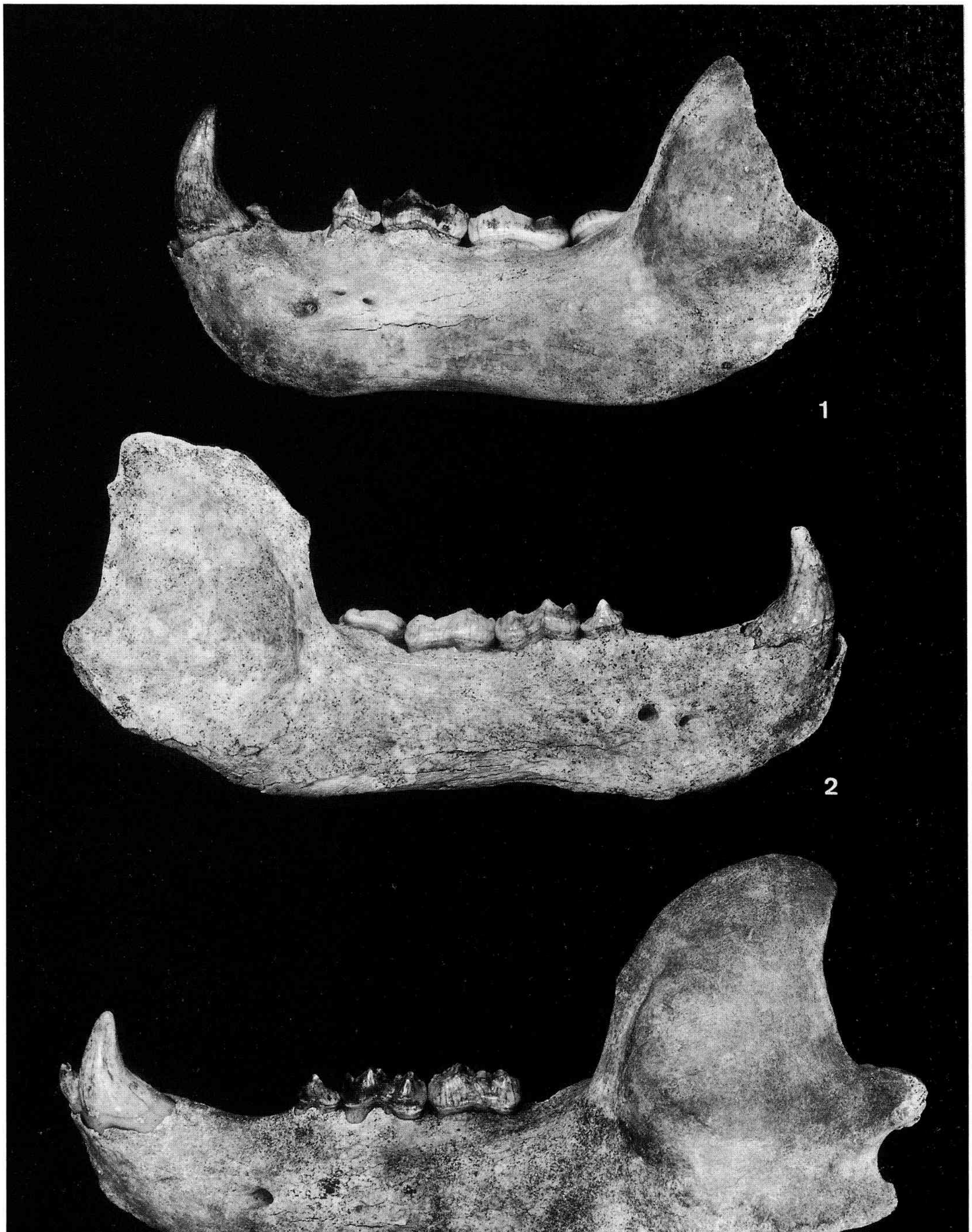
It is conceivable that brown bear ritual of Okhotsk Culture gave some influence to the fomation of "Iwomante" of the Ainu, but the major body of "Iwomante" which was ethnographically known has been organized by Satsumon people, the natives of the land of Hokkaidō.



図版 1　オタフク岩洞窟の外観(上：南から、下：東から)

図版 2　オタフク岩洞窟におけるヒグマ頭骨出土状況

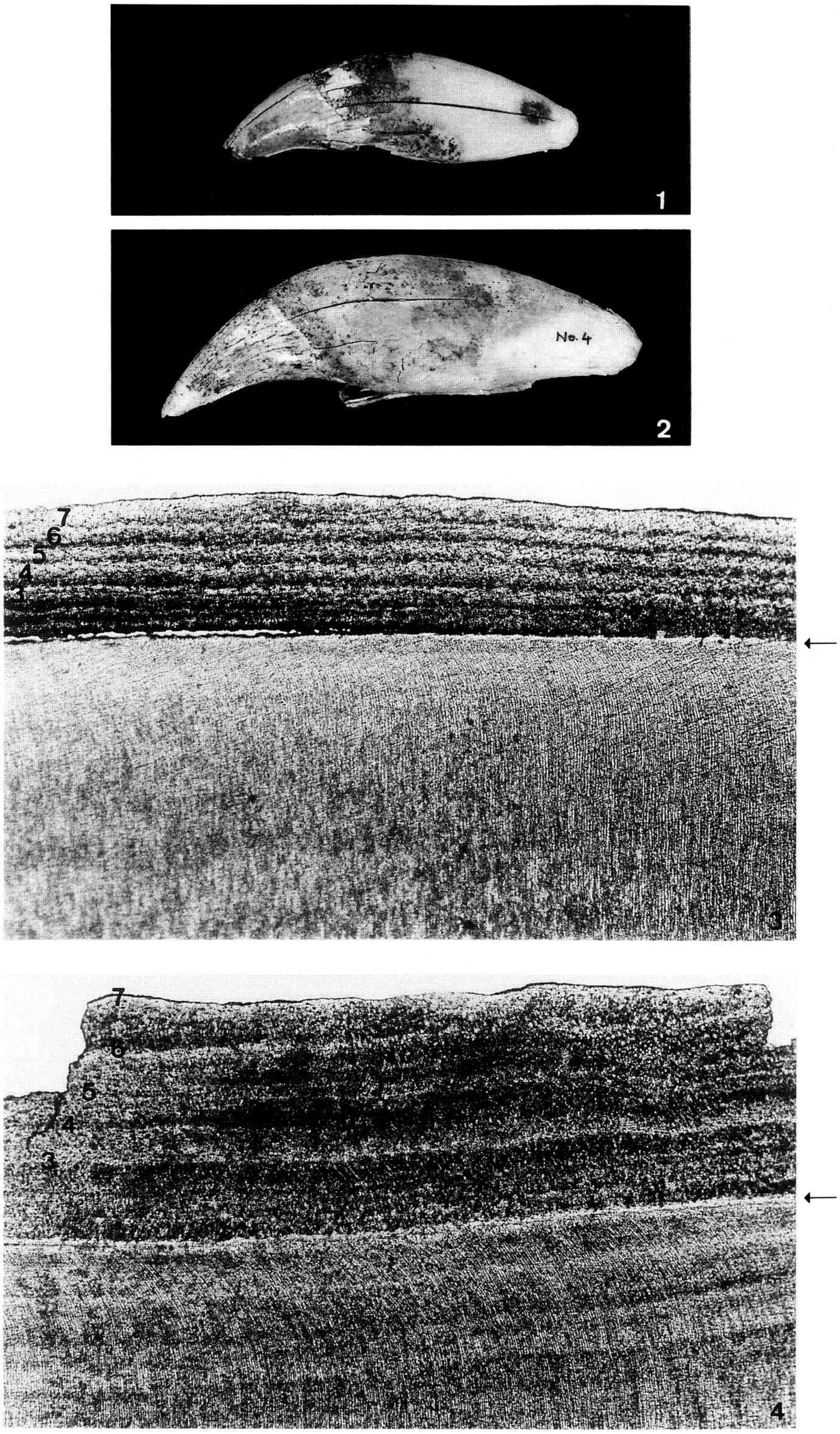
図版３　オタフク岩洞窟出土ヒグマ上顎骨(約½)
〔１：No.13(♀)、２：No.３(♂)、３：No.１(♂)、４：No.２(♂)〕



図版４　オタフク岩洞窟出土ヒグマ下顎骨(約½)
〔１：No.６(♂)、２・３：No.８(♀)〕

1
2
3

図版 5　オタフク岩洞窟出土ヒグマ頭蓋骨(約½)
〔1：No.1(♂)、2・3 No.16(♀)〕



図版6　オタフク岩洞窟出土ヒグマ犬歯とその歯根部顕微像（1・2：約3/5、3・4：約160倍）

（1・3：No.10（♀）、2・4：No.3（♂）、3・4右端の←は象牙セメント質境を、左上の数字は何年目の冬の成長輪かを示す。）